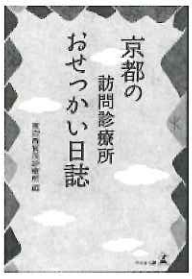
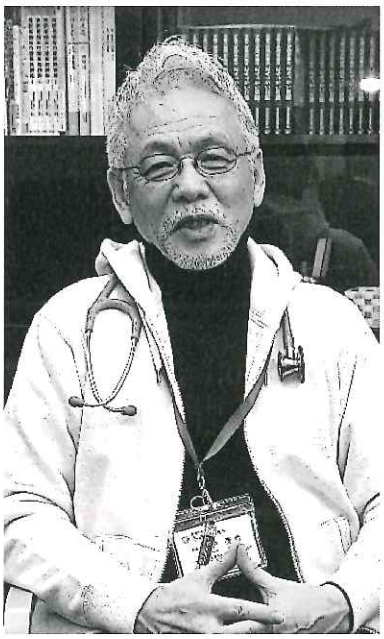
2019年2月17日　朝日新聞
（承諾番号：19-1285）

京の一冊

■京都の訪問診療所　おせっかい日誌　診療所で働く医師や看護師、在宅医療を望む患者との交流を記録。認知症の患者が退院後に住む家を探したり、末期がんの患者の出かけたいという願いをかなえたり。私生活に踏み込む「おせっかい」の精神を紹介する。昨年8月出版。
幻冬舎メディアコンサルティング出版・税込み1512円



患者に「小さな親切」



訪問診療医　渡辺康介さん（70）

わたなべ・こうすけ　1948年、北区生まれ。府立医科大医学部卒。府立医科大付属病院（上京区）、済生会京都府病院（長岡京市）で泌尿器科医として勤務した後、長岡京市内で開業した。1998年には、主にデイサービスと訪問診療を行う渡辺西賀茂診療所（北区）を開設。20年以上にわたって地域の在宅医療を担っている。

生まれ育った北区の上賀茂神社近くに開いた診療所を拠点に、地域の在宅診療に奔走する医師がいる。渡辺西賀茂診療所の院長、渡辺康介さん(70)。「これでもか、というほどおせっかいをしてしまう。でも、疾患以外の問題にも踏み込めないと在宅医療の意味がない」と語る。

渡辺さんが府立医科大を卒業して選んだのは泌尿器科医としての道だった。1992年に長岡京市に医院を開業。その後、当時中学生だった娘が不登校になったことをきっかけに生活が一変した。

娘の食事を作り、親の会やカウンセラーの元に通う日々。1日に数時間だけ、自身の医院や内科医の妻が自宅近くに開業した「渡辺医院」の外来で働いた。

その頃から、渡辺さんには気になることがあった。患者が高齢になるにつれ、「家にいたい」「病院に行きたくない」と言うようになる。どうやって診察を続けていけばいいのか――。

「ずっと先生に診てほしい」という声に応えようと、娘が大学生になったのを機に、診療所をつくることを決めた。

デイケアと訪問診療を専門にする渡辺西賀茂診療所を北区に開設。専門外だった緩和治療についても専門医のアドバイスをあおいで必死で勉強した。2003年からは末期がん患者の在宅緩和ケアを本格的に始めた。対応するのは24時間365日。「何か魅力を感じないとやっていけない」と話すが、それに見合う喜びがある。

家族と上京区に住む39歳の女性に出会ったのは13年。末期の食道がんで、「どうしても娘と潮干狩りに行きたい」と訴えていた。

末期がんの患者は「やりたいことがあっても、現実的にはできない、と天井ばかり見ている人が多い」と渡辺さん。残された時間が短いことを理解した女性の決意を察し、看護師2人が同行することで、愛知県の知多半島に潮干狩りに行けるようにした。女性からは笑顔で「あんたら、おせっかいやなあ」と言葉をかけられた。

女性は潮干狩りのあと、おだやかな表情で亡くなった。人生の最終盤に患者が願いをかなえられたと感じる瞬間に、この仕事をしてよかったという思いがこみ上げる。

患者の私生活にまで踏み込む渡辺さんの「おせっかい」エピソードは数多い。入院していた一人暮らしの認知症の男性が自宅で最期を迎えられるよう、アパートを探したこともある。

「初めて訪問する家庭では、たとえ深夜に呼び出されても、生まれ育った場所や思い出、何がしたいかを必ず聞く。話し合いながら、こんなこともできるんだと知ってほしいから」

訪問診療医として1千人近くを診てきたという渡辺さん。「精神的なケアや家族への働きかけ。そういうおせっかいの中で、患者さんもご家族も、前向きに生きられるようになる」。大きなお世話ではなく、「小さな親切」として、これからもおせっかいを続けるつもりだ。（足立菜摘）

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる